

# 『トロッコ』の教材研究

大橋幸雄、木村直人、九津見幸男、高山裕一

## 1 はじめに

『トロッコ』は芥川龍之介の短編小説である。1922年（大正11年）3月1日発行の雑誌「大観」（実業之日本社）に発表された作品（注1）で、『蜘蛛の糸』や『杜子春』などとならび、芥川の少年向けの作品の一つと位置づけられており、平成28年度の東京書籍、三省堂の中学校1年の教科書に採用されている。

『トロッコ』の教材研究に限らず、小・中学校の文学作品の教材研究では、分析批評を応用した「視点」と「行動描写」と「背景描写」を中心に読み解いていくことで確かなものになると考えている。

## 2 『トロッコ』の「中心内容」

八つになる良平は、軽便鉄道敷設の工事を毎日見物に行き、「せめては一度でも土工といっしょに、トロッコへ乗りたい」、「（トロッコに）乗れないまでも、押すことさえできたら」と思っていた。

ある日、良平は、土工たちの姿が見えないのを幸いに、子供たち三人でトロッコを押し、トロッコに乗って有頂天になったが、突然の土工の怒鳴り声に一目散に逃げ出した。

それから十日余り立った日、良平は二人の土工の許しを得て、憧れのトロッコを押すことができた。最初のうちは面白かった。だが遠くまで来たときに、親近感を抱いていた二人の土工に思いがけず「われはもう帰んな。俺たちは今日は向こう泊まりだから。」と言われる。良平は、たった一人で、泣きそうになりながら暗い線路を駆けて戻った。

塵労に疲れた現在の良平は、理由もなく、そんな少年の日の情景を思い出すことがある。

## 3 『トロッコ』の「視点」

「視点」とは、『トロッコ』が誰の目を通して語られているかということである。『トロッコ』は、「語り手」の目を通して語られるところから始まるが、

- ・ それがおもしろさに見に行っただのである。（214 ページ 4 行）（注2）
- ・ 良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。  
（215 ページ 6 行）
- ・ 良平はほとんど有頂天になった。（215 ページ 21 行）
- ・ 良平は彼らを見たときから、何だか親しみやすいような気がした。

（216 ページ 6 行）

- ・ 良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。（216 ページ 20 行）

- ・良平はひとりいらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。(217 ページ 40 行)
- ・良平は冷淡に「ありがとう。」と言った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思  
い直した。(218 ページ 6 行)
- ・良平はトロッコに腰をかけながら、帰ることばかり気にしていた。(218 ページ 16 行)
- ・そんなことに気持ちを紛らせていた。(218 ページ 21 行)
- ・良平はいよいよ気が気でなかった。行きと帰りと変わるせいか、景色の違うのも不安だ  
った。(219 ページ 7 行)

のように、良平の心情が直接的に語られている描写（「心理描写」あるいは「心情描写」）が、作品の早い段階から何か所も見られるので、作品全体としては「良平」の視点で語られていると言える。したがって、この後論じる「行動描写」も「背景描写」も「良平」の心情を読み取っていくことになる。

#### 4 『トロッコ』の「行動描写」と「背景描写」

作品の冒頭から順を追って、注目したい「行動描写」と「背景描写」を取り上げてみる。

##### (1) 良平のトロッコへの憧れの場面

###### ① 「良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。」(214 ページ 2 行)

良平の行動描写。「毎日見物に行った」ところから、良平がいかにトロッコに憧れていたかがわかる。そんな工事現場で、働く土工を眺めながら、「土工になりたい」と思い、それが無理なら「一度でも土工といっしょにトロッコへ乗りたい」と思い、それさえも無理なら「(トロッコに) 乗れないまでも、押すことさえできたら」といつも思っていた。

そんな良平の思いは、一度目は、土工の目を盗んで子供だけで勝手にトロッコを押して、トロッコに飛び乗るという行動によって叶えることになるが、土工に怒鳴られ一目散に逃げだすという結果に終わる。

そして、二度目に、二人の土工の許しがもらえて、「一度でも土工といっしょにトロッコに乗りたい」という願いが叶うことになる。

##### (2) 良平が初めてトロッコに乗った場面

###### ② 「トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。」(215 ページ 1 行)

背景描写。トロッコに憧れる良平は、どうしてもトロッコに目がいつてしまう。しかも、土工たちの姿は見えない。そのトロッコは、日々の仕事の苦労を物語るかのように「泥だらけになったまま」で良平の前にたたずんでいる。しかも、薄明るい中にいつでも動き出せると良平に訴えかけるように並んでいる。トロッコを擬人化することで、良平のトロッコへの憧れの強さが伝わってくる。

③「そのとたんに突き当たりの風景は、たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開してくる。」(215 ページ 18 行)

背景描写。勢いよく下りだしたトロッコに乗る良平の目に次から次へと飛び込んでくる風景から、良平の気持ちの高ぶりが伝わってくる。その高揚感、トロッコのスピードが増すにつれて有頂天へと達した。

④「しかしその記憶さえも、年ごとに色彩は薄れるらしい。」(215 ページ 39 行)

語り手による感想。作品の終末の「良平は二十六の年、妻子といっしょに東京へ出てきた。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。」と呼応して、この話が過去の体験を回想する形で展開していることが分かる。つまり、この語り手は、大人になった良平である。この話は、大人になった良平によみがえった記憶であり、あの時の有頂天になった記憶も、一転して一目散に逃げだした記憶も、年を追うごとに次第に薄れていっている。

### (3) 土工に許されてトロッコを押し始めた場面

⑤「良平は、二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。」(216 ページ 15 行)

良平の行動描写。「おじさん、押してやろうか。」と聞いたところ、「おお、押してくよう。」と土工からトロッコを押してくれと懇願された。押していいとの許しが出た上でトロッコを押せる喜びが、「力いっぱい」トロッコを押す行動から伝わってくる。良平の「(トロッコに) 乗れないまでも、押すことさえできたら」という願いが叶う瞬間である。

⑥「そこには両側のみかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。」(217 ページ 10 行)

背景描写。日を受けた黄色いみかんの実は、きらきらと輝く明るいイメージである。いつまでも押していいと言われた良平の喜びが伝わってくる。

⑦「良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。」

(217 ページ 13 行)

良平の行動描写。⑤の「力いっぱい」に重なる。いつまでもトロッコを押すことができる喜びが、「全身で」トロッコを押す行動から伝わってくる。そして、「登り道のほうがいい、いつまでも押させてくれるから。」と思うのである。

⑧「良平はすぐに飛び乗った。」(217 ページ 17 行)

良平の行動描写。土工から「やい、乗れ。」と言われた良平は、一瞬の迷いもなくトロッコに飛び乗った。「乗れないまでも、押すことさえできたら」という願いだけでなく、「一度でも土工といっしょにトロッコへ乗りたい」という願いまでもが叶った瞬間である。良平の心はこの上ない嬉しさに満ち溢れている。

⑨「トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑の匂いをあおりながら、ひた滑りに線

路を走りだした。」(217 ページ 17 行)

背景描写。みかん畑全体に広がるみかんのいい匂いをあおるように嗅いでいる様子から、良平の満ち足りた、幸せな気持ちが伝わってくる。良平の心情を嗅覚で表現している。そんな幸せな良平を乗せて、トロッコはいよいよスピードを増しながら線路を滑るように下っていく。

⑩「良平は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。」(217 ページ 20 行)

良平の行動描写。トロッコに夢中になっている様子や良平の幸福な気持ちが「風をはらませながら」から伝わってくる。良平の心情を触覚で表現している。この表現は、214 ページ 9 行の「土工のはんてんの裾がひらついたり」という表現と呼応しており、その景色を眺めながら土工といっしょにトロッコに乗りたいと憧れていたことが今実現しているのである。

なお、219 ページ 11 行では、この場面とは対照的に、幸せを感じていたときの「羽織を道端へ脱いで捨て」ていくことになる。

#### (4) 一回目の上り下りの後、またトロッコを押し始めた場面

⑪「三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。」(217 ページ 24 行)

良平の行動描写。竹やぶのあるところで下りが終わり、またトロッコを押して登ることになる。そんなトロッコを良平は「重い」と感じ始めるのである。これは一回目の登りでは全く感じなかった気持ちであり、まだはっきりとしたわけではないが、良平の心の中にいくぶんかの不安が芽生えた瞬間である。

⑫「竹やぶはいつか雑木林になった。」(217 ページ 25 行)

⑬「爪先上がりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。」(217 ページ 25 行)

どちらも背景描写。良平の心に芽生えたいくぶんかの不安に呼応し、登っていくごとに「竹やぶ」「雑木林」「赤さびの線路」「落ち葉」とかげりのあるイメージが次々と重なって、良平の不安が少しずつ大きくなっていく。しかも、「赤さびの線路も見えないほどの落ち葉のたまっている場所」では、トロッコはいっそう重く感じたはずであり、良平の気持ちは少しずつ沈んでいった。

⑭「今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。」(217 ページ 28 行)

背景描写。登り道を登りきってほっとした良平の目に飛び込んできたのは、高い崖の向こうに開けた海であり、良平にとって初めて見る景色だった。そして、「あまり遠く来すぎた」と、漠然として感じていた良平の不安が急に現実のものとなった瞬間である。そんな海は良平にとってはただ「薄ら寒い」海でしかなく、良平の心もまた、あまりにも遠く来すぎた不安やそろそろ帰らなくちゃという焦りの中で薄ら寒いものになっている。

この場所で、明から暗へ、喜びから不安や焦りへと良平の気持ちが決定的に変わったのである。

⑮「三人はまたトロッコへ乗った。」(217 ページ 31 行)

良平の行動描写。一回めの「すぐに飛び乗った。」と比べると、平凡な描写であり、良平の楽しさは伝わってこない。「おもしろい気持ちにはなれなかった。」「もう帰ってくればいい。」と良平の心情描写もある。この後も、トロッコについての描写はどんどん平凡なものになっていく。良平の気持ちがトロッコからどんどん離れていくことが表現されている。

⑯「その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店の前だった。」(217 ページ 37 行)

背景描写。暗い場所にある茶店である。良平の心から明るさがどんどんなくなっている。そんな良平の心の暗さは、「菓子には新聞紙にあったらしい、石油の臭いが染み付いていた。」からも伝わってくる。嬉しい気持ちでいたらいっこうに気にならない些細なことが不快になっている。良平の心の不安や焦りはどんどん大きくなっている。

⑰「良平はひとりいらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。」(217 ページ 40 行)

良平の行動描写。「いらいらしながら」と心情も表現されている。いらいらした気持ちで、「トロッコの周りを回ってみた」のであり、回ることに特に意味があったわけではなく、いらいらした気持ちをなんとか紛らわしたいのである。

(5) 二回目の上り下りの後、またトロッコを押し始めた場面

⑱「良平は車に手を掛けていても、心はほかのことを考えていた。」(218 ページ 12 行)

良平の行動描写。良平にはもうトロッコを押そうという気持ちさえなく、土工たちが押すトロッコにただ手をかけているのである。そして、帰ることばかり気にしているのである。

⑲「その坂を向うへ下りきると、また同じような茶店があった。」(218 ページ 14 行)

良平の行動描写と背景描写。一回めの下りるところの表現が 8 行、2 回めの下りところの表現が 6 行あったのに比べて、3 回めの下りところの表現はこの一文だけである。もはや描写すらなくなっている。あんなにトロッコに乗って下りることを楽しんでいた気持ちはもうどこにも残っていない。不安と焦りでいっぱい良平には周りの景色は何も見えていない。

茶屋の描写も、「また同じような」としかない。良平は何も見えていないのである。

⑳「茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。」(218 ページ 17 行)

背景描写。美しいはずの梅の花には目がいっていない。良平に見えるのは、消えかかっている西日の光だけで、良平の心はいっそう暗く沈んでいく。日暮れを前に、家に帰らなければという焦りはどんどん増してくるが、茶屋で休んでいる土工たちにそれを言い出す

こともできず、「トロッコの車輪を蹴ってみたり、押してみたり」して焦る気持ちを紛らせていた。

#### (6) 家を目指して必死に走り続ける場面

- ②①「竹やぶのそばを駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた。」(219 ページ 6 行)

背景描写。茶店から戻ってきた土工たちに、突然「われはもう帰んな。俺たちは今日は向こう泊まりだから。」「あんまり帰りが遅くなるとわれのうちでも心配するぞら。」と言われ、良平は、暗くなる一方の道を一人で帰らなければならないことを知り、帰り道の遠さに泣きそうになるが、意を決して走り出す。

土工からもらった菓子包も、トロッコを押して登ってきた板草履も、トロッコに乗って下り道を楽しんでいた羽織もと、トロッコに関わったものを次々と脱ぎ捨てて、良平は走り続ける。夕焼けに色に染まっていた空からオレンジ色の明るさと暖かさは失われ、夕闇と冬の寒さにおおわれていく様子が、良平の視覚と触覚を通して描写される。それは、今の良平のいっそうの焦りと不安に重なる。

- ②②「みかん畑へ来る頃には、辺りは暗くなる一方だった。」(219 ページ 12 行)

背景描写。⑥で「日を受けた黄色いみかんの実のきらきらと輝く明るいイメージ」は全く失われ、戻ってきたみかん畑の辺りもまた暗くなる一方だった。良平の焦りと不安は頂点に達し、「命さえ助かれば」この体はどうなってもいいとさえ思いながら、走り続ける。

やがて良平の知っている村外れの工事場が見えても、村に入って女衆や男衆に声を掛けられても不安が消えることはなく、ただただ走り続け、うちの門口へ駆け込んだ。そして、不安からようやく解放された良平は、ひたすら大声で泣き続けた。

#### (7) 現在の良平の思い

- ②③「が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。全然何の理由もないのに？」(220 ページ 19 行)

語り手の感想。大人になった良平が、八歳の時のトロッコにまつわる出来事を思い出すのには理由があるのだと語り手は言う。このことによって、「二月の初旬のある夕方」の出来事と「そののち十日あまりたってから」の出来事が、単に時間の順序で並べられた二つの思い出ではなく、今の良平の回想という形で語られた物語であることが分かる。今の良平だからこそ忘れることができない、トロッコへの憧れが破れ、そこから逃げ出さなければならなかった二つの出来事なのである。

- ②④「塵労に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。」(220 ページ 21 行)

語り手の感想。②③でいう理由がこれである。八歳の時に不安や焦りの中で必死に走り続けた道が、塵労に疲れた今の良平の前にも続いていると確かに感じるのである。

## 5 『トロッコ』の作品の意図

末尾に「現在の良平の思い」を置くという形を通して、作品が読み手に訴えかけているものは明確に語られている。それは、「期待や憧れが思い通りにならないことが分かったときの焦りや不安」である。

中学1年生の教材であることを考えると、作品の意図については直接それを問うことには困難さがあると思われる。ここでは、なぜ末尾に大人になった良平の場面を描いたのかを、④・②③・②④がある場合とない場合を比べて考えさせることで作品の意図に迫っていくことを期待したい。

## 6 『トロッコ』の描写の見事さ

『トロッコ』の学習の目標は、「情景描写などの表現の効果について考える。」(220 ページ)と設定されている。4で、一つ一つの「行動描写」と「背景描写(情景描写)」について詳しく読み取ってきたが、特に三回のトロッコの上り下りの場面は、良平の心情の変化が、行動描写と背景描写によって見事に描き出されている。

上りの行動描写では、一回めは「力いっぱい」「全身で」からトロッコを押すことができた喜びをが伝わってくるのに対して、二回めは「重い」にいくぶんの不安が感じられ、三回目には「手を掛けて」とトロッコを押そうという気持ちさえなくなっている。

下りの行動描写では、一回目は「すぐに飛び乗っ」て「羽織に風をはらましながら」トロッコに乗れたことを喜んでいるが、二回目は「またトロッコに乗った。」という平凡な描写になり、三回目はトロッコに乗る描写はなくなってしまっている。

背景描写も良平の心情の変化に重なり、一回目は「みかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。」ときらきらと輝く明るいイメージが描かれるが、二回目は「竹やぶ」「雑木林」「赤さびの線路」「落ち葉」「薄ら寒い海」とかげりのある暗いイメージが重なって描かれ、三回目は「西日の光が消えかかっている。」と暗いイメージにすっかりおおわれてしまう。

芥川は、見事な計算の上でこの作品を作り上げているのである。

## 〈引用文献〉

注1 大塚浩、2015年3月、「中学校国語教科書教材研究——「トロッコ」の考察を中心に——」、静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第46号

注2 芥川龍之介作『トロッコ』、新編新しい国語1、平成28年2月10日、東京書籍、214～220ページ

〈参考文献〉

- 1 長尾高明、「鑑賞指導のための教材研究法」、1990年2月、明治図書出版
- 2 大橋幸雄・渡邊弘、「『ごんぎつね』の教材研究」、2017年2月、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部教職実践センター研究紀要第4号
- 3 白井宏、「芥川龍之介『トロッコ』について」、1978年8月、名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要
- 4 角谷有一、「中学校指導要領の全面実施を前に文学教材の可能性を探る——復活教材『トロッコ』を読み直す——」、2011年8月、日本文学60(8)
- 5 寺田守、「小説教材の読みに関する学習者論的研究——『トロッコ』（芥川龍之介）の場合——」、2002年、広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第51号
- 6 大塚浩、「芥川龍之介研究——『トロッコ』の考察を通して——」、2016年3月、静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第47号